

## 詩篇61篇1-4節 「岩にまで導く方」

### 1A 地の果てからの祈り

1B 神の幕屋から離れた所

2B 必ず届く祈り

### 2A 衰え果てる心

1B 尽き果てた状態

2B 神の許し

### 3A 及び難いほど高い岩

1B 自分以上の岩

2B 岩なるイエス・キリスト

1C 強固な避難所

2C 御霊の岩

3B 神の住まい

## 本文

詩篇 61 篇を開いてください。午後の学びで、61 篇から 65 篇までを読みます。今朝は、61 篇 1-4 節に注目したいと思います。

1 神よ。私の叫びを聞き、私の祈りを心に留めてください。2 私の心が衰え果てる時、私は地の果てから、あなたに呼ばわれます。どうか、私の及びがたいほど高い岩の上に、私を導いてください。3 まことに、あなたは私の避け所、敵に対して強いやぐらです。4 私は、あなたの幕屋に、いつまでも住み、御翼の陰に、身を避けたいのです。セラ

私たちはダビデの詩篇が、実に現代社会の中に生きる私たちにそのまま語られる言葉を持っていることを発見します。それは、これだけ便利で、生活も制度的に保障されているはずの社会なのに、あらゆる方面でストレスやプレッシャーの多い中に生きているからです。約三千年前に生きていたダビデも、同じようにプレッシャーの中に生きていました。この詩篇は、おそらく息子アブシャロムの反逆から逃げている時に歌われたものではないか、とされています。アブシャロムがヘブロンで自分を王であると宣言し、彼になびく者たちがかなりいたので、エルサレムにいたダビデは遠くに逃げました。エルサレムから東、アラバのほうに下っていき、ユダの荒野のほうに動きました。最終的には、ヨルダン川を渡り、マハナインにまで行き、そこに留まっていた。

息子からクーデターを仕掛けられ、そして側近の中にも裏切る者が続出し、民の多くが彼から離れていき、そして自分は着の身着のままそこを出ていかなければいけません。「心が衰え果てる」とダビデは言っていますが、まさにその状態になりますね。二重苦、三重苦の苦しみを味

わっていました。

## 1A 地の果てからの祈り

### 1B 神の幕屋から離れた所

そして彼は、祈りと叫びを聞いてほしいと言っています。「地の果てから」とあなたを呼んでいると言っています。もちろん、そこは地の果てではありません。距離的なことをもちろん言っているではありません。歩ける距離はたかが知れています。けれども 4 節を見れば分かりますが、「あなたの幕屋に」とあります。神の箱のあるエルサレムから離れてしまっているのです。心理的に彼は「地の果て」と感じているのです。自分自身の心で持っている、ここにいれば安心だと思われる場所や環境から離れてしまったので、地の果てと表現しています。

使徒たちに対して、イエス様は、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、彼らが力を受け、そして、「地の果てにまで、わたしの証人となります。(1:8)」と言われました。これは使徒の働き之初めにイエス様が約束されたことですが、その実現は終わりに見ることができます。パウロが、ローマの中で福音を語っているところです。ユダヤ人の使徒たちにとって、ユダヤ人にいるエルサレムとユダから離れて、ローマまで行くなど想像さえできませんでした。その聖霊の火はユダヤからサマリヤに行きました。ついに異邦人が福音を受け入れるようになり、シリアとの国境地域にあるトルコ領にアンテオケがありますが、そこに教会ができました。熱心なユダヤ教徒のパウロが、キリスト者を迫害していたパウロが、復活のイエス様に会い回心しました。そして彼が異邦人へ福音を携える者となりました。そのパウロでさえ、地元のタルソから離れ、今のトルコに当たる小アジアだけを回っていました。ところが神が、夢の中で一人のマケドニア人を出させて、「私を助けてください。」とパウロに言わせたのです。そこで彼にとっても大きな冒険となる、ギリシヤそしてローマへの宣教旅行となったのです。

私たちは、心の中で自然に「ここまでなら私は安心だ」という境界線を作っています。それを日常はあまり意識していないかもしれませんが、誰か他の人たちといっしょにいれば、たとえ遠くに行ってもまだ自分の領域だと思えるでしょう。必ずしも地理的なことを話していません。けれども、どこか、自分の安心できる環境や領域から離れると、ここで言っている「地の果て」を感じるかと思えます。ここにいれば安心だと思ふところから離れる時、地の果てを感じます。

私たちは海外にいる時に、日本においても、その地においても、珍しがられる所にいました。現地では日本人を見るのと驚かれ、日本に戻れば「どこなのか？」と首をかしげるようなところにいました。妻よりも私のほうが、肝っ玉が小さくて、初めに訪問した時は食にも当たったせいか、高熱を出して、たくさん吐いてしまいました。そして、そこに引越した時には目が腫れて、ずっと直らないでいました。「地の果て」にふさわしい状態でした。

## 2B 必ず届く祈り

けれども、そこにも主はおられます。イエス様は、「世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。(マタイ 28:20)」と言われました。そこに主がおられること、いや自分の安心できる場から離れたからこそ、今まで感じることのできなかつたイエス様のご臨在を感じることができました。したがって私たちは、地の果てにいても感じて、そこにも主がおられます。そして祈りを聞いてくださいます。

## 2A 衰え果てる心

### 1B 尽き果てた状態

そしてダビデは、「私の心が衰え果てる」と言っています。弱くなっている、衰弱していると言ってもよいでしょう。英訳では、overwhelm という言葉が使われています。日本語にすると「圧倒される」という意味です。困難に対して、もう自分のできることはない、その力や知恵が尽き果ててしまった状態です。次にどこに進んでいけばよいか分からない、どうすればよいか分からない、という状態です。私がアメリカにいる時に、教会の事務所でかかってくる電話を受けていました。祈ってほしい人たちからの電話です。しばしば、その教会の中でも祈りの奉仕者たちの間で、「この祈りの奉仕に関わると、自分の問題が小さくなっていく。」という話がありました。私もそうでした、電話をかけてきた人は、「家に帰って来たら、すべてのものがなくなっている。」というのです！奇想天外な事件として、テレビ番組で出てきそうな話です。その他、自分の加盟している健康保険では治療できない、病に罹っているであるとか、そういった類のものでした。

私たちは、いろいろな形で人生の中で壁にぶち当たります。そのぶち当たったところには、実はそこは分岐点になっています。二つの道があって、一方の道を選べば大きな勝利を得ることができます。もう一方に進むと大変なことになります。日本のドラマの刑事ものは、その犯罪者、加害者までが同情を引くような話になっていますね。どうしようもない状況に追い込まれていて、やむにやまれず罪を犯してしまったという流れです。私たちは、犯罪まで行かなくても、このような道を選び取ってしまう過ちをしばしば犯します。かつての自分の古い習慣に引き戻されてしまうかもしれません。お酒に走るとか、その他の古い習慣に戻ってしまうかもしれません。私たちが大きな決断を、感情的になっている時はしてはいけませんね。けれども、早まって決断してしまう時があります。その時が辛いので、感情に任せて、後戻りするのがほとんどできないような重要な決断をしてしまいます。自暴自棄になってしまうのです。しかし、正しい道を選ぶこともできます。そこに行けば、今度は神が助けてくださるのです。

## 2B 神の許し

主はしばしば、私たちが自分たちの限界に至ることをお許しになられます。私たちがもがいて、自分たちの試みや計画が失敗することをお許しになります。「これがあれば、助かるかもしれない。」という逃れの道も閉ざされる時があります。それは、自分自身に抛り頼まないで、神に抛り頼むことができるようにするためです。使徒パウロは、小アジアで受けた苦しみについてこう言いま

した。「兄弟たちよ。私たちがアジアで会った苦しみについて、ぜひ知っておいてください。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにはいのちさえも危くなり、ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。(2 コリント 1:8-9)」自分自身の内にある力が付きて、神ご自身に助けを呼び求めるように促されるのです。

### **3A 及び難いほど高い岩**

#### **1B 自分以上の岩**

そして、今朝の本文で一番大事な言葉を見ます。「私の及びがたいほど高い岩の上に、私を導いてください。」及びがたいほど高い岩です。私たちは、このような岩に出会うことは少ないかもしれませんが、けれども、イスラエルには、中東には岩山が数多くあります。どんなロック・クライマーもよじ登っていくことはできないだろうと思われる、断崖絶壁です。しかし、その上に神は私たちを導くことのできるお方です。私たちの能力を超えて、事を成し遂げてくださる方です。使徒パウロは、エペソにいる人々のために祈りました。「また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知るすることができますように。(エペソ 1:19)」それはどのような力かと言いますと、「私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる(エペソ 3:20)」力です。

ダビデは、王でありました。ですから、彼には大きな地位と主権と力がありました。そのような位置にいますと、どうしてもすべて自分でできるのだという錯覚に陥ります。自分の内にあるものによって物事を解決しようと思えます。イエス様のところに近づいたユダヤ人教師ニコデモに対して、イエス様は、「新しく生まれなければ、神の国を見ることはできない。」と言われました。ニコデモは、「どうして、そのようなことがありうるのでしょうか。(ヨハネ 3:9)」と言いました。彼は、自分でできることの中ですべてを行っていかうとしていたのです。自分ができるかできないか、その尺度ですべてを計り、生きていました。このような生き方は必ず行き詰まります。しかし、及びがたいほどに高い岩があるのです。ダビデは地位と権力と力を持っていても、なおのこと自分よりも上に力のある方がおられることを信じたのです。

#### **2B 岩なるイエス・キリスト**

##### **1C 強固な避難所**

そしてダビデは、「岩」という言葉を使っています。イスラエルの中でも、荒野に行けば岩地がずっと広がります。ダビデは、サウルから逃げる時、そしてアブシャロムから逃げた時も、この岩がたくさん連なっているところに逃げました。ダビデが岩に対して抱いていたイメージは、3節にあるように「避難所」であり、「強いやぐら」です。自分が避けて守られる所であり、そして頑丈で堅く、敵からの攻撃から守られるところです。

## 2C 御霊の岩

そしてダビデは好んで、神を「岩」と呼びました。62 篇にも 2 節には、「神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。私は決して、ゆるがされない。」と言っています。そして、聖書の数々の著者も、同じように神を岩と呼びます。

預言者ダニエルは、メシヤあるいはキリストを「岩」と呼びました。「あなたが見ておられるうちに、一つの石が人手によらずに切り出され、その像の鉄と粘土の足を打ち、これを打ち砕きました。(2:34) 人手によらずに切り出された石です。バビロンの王ネブカデネザルは、人の像の夢を見ました。頭が金、胸が銀、腹と太ももが青銅、両脚が鉄、そして足が鉄と粘土です。これらはバビロン、ペルシヤ、ギリシヤ、ローマ、そして最後の世界帝国を表していました。ところが、人手によらず切り出された石が、その足の部分に当たりました。そして人の像は全体が粉々に砕けました。これは、異邦人の支配する国、終わりの日に世界を支配する国をキリストが来られて、粉々に砕かれるということです。キリストの再来の預言です。

なぜ、人手によらずに切り出された、とあるのでしょうか？ そうです、キリストは人の手によらないでこの世に現われました。あと一か月後に、私たちはクリスマスを祝います。キリストがお生まれになる時、処女から生まれました。母マリヤはまだヨセフを知っていませんでした。けれども、聖霊によって妊娠したのです。天使ガブリエルが言いました。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。(ルカ 1:35)」この方が私たちの岩です。つまり、罪なき方として来られたということです。神であり、聖なる方であるのに、この罪深き世に来られたということです。ですから、この岩は私たちを救うことができます。罪があれば、その罪によって本人が死ぬだけです。しかし、罪を持っておられなかったので、罪の中にある私たちを外側から救うことができます。

私たちは肉にすぎない者たちに、頼ろうとします。しかし、それらは危うい者、不確実な者、欠けた者です。人に拠る方ではないからこそ、罪なき方だからこそ、全き方だからこそ、私たちを完全に救うことができるのです。この方に頼れば間違いないのです。

そして、岩なるキリストはモーセが岩を打ったところにも表れています。イスラエルの民が荒野の旅をしている時に、喉が渴いて、主がここにいるのかどうかと叫びました。モーセは主に叫ぶと、主は杖を持ってきて、岩を打ちなさいと命じました。それでモーセが打つと水が出てきたのです。使徒パウロは、「彼らについてきた御霊の岩から飲んだからです。その岩はキリストです。(1コリント 10:4)」と言いました。岩をモーセが打ったのは、キリストが打たれたことを表していました。「彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。…彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。(イザヤ 53:4,5)」キリストが、鞭で打たれました。それは私たちの背きの罪のためである、とあります。キリストは、私たちの罪のために来られ、その罪となってくださいました。それゆえ、私たちに癒しをもたらし、罪による魂の渴きを完全に満たしてくださったのです。

ですから、キリストは完全な方だけでなく、私たちの負い目を処理してくださる方です。ご自身の上に私たちの犯した罪をすべて負ってくださったのです。そして、罪をすべて赦してくださいました。したがって、私たちは重荷を下ろして、この方のところに来て、安きを得ることができます。私たちが負う必要がないのです。イエス様が負ってくださいました。私たちは、一生懸命自分の負い目を自分で償おうとしています。けれども、すべてをイエス様に頼ることができるのです。

### 3B 神の住まい

このように、人手によらず切り出された石が、また杖で打たれて水を出した岩が、私たちのキリストであり、私たちはこの方にあって守られ、安心なのです。それでダビデは、4節で、この岩のところに来ることが、神の幕屋にいることであると言っています。キリストがおられるところに、私たちは神と共に住むことができます。

ところで、イエス様はご自分が、捨てられた石になることをユダヤ人の宗教指導者に語られました。彼らに捨てられることによって、それが礎の石になるという詩篇のキリスト預言を引用されました。そして彼らにこう言われたのです。「また、この石の上に落ちる者は、粉々に砕かれ、この石が人の上に落ちれば、その人を粉みじんに飛ばしてしまいます。(マタイ 21:44)」

イエス様は、二つのことを語っておられます。一つは、この捨てられた石、つまり十字架につけられたキリストご自身ですが、この方の上に落ちて粉々に砕かれること。もう一つは、十字架につけられ、よみがえられたキリストが、人の上に落ちて、その人が粉みじんに飛ばしてしまうことです。どちらも粉みじんになるのですが、一つは自らキリストの上に落ち、もう一つはキリストがその人の上に落ちるのです。

私たちが、心が衰え果てている時に、及ぶことのできない高い岩に私たちを導いてくださいます。私たちには、その時に二つの道があると先ほど話しました。この岩に導かれるのであれば、私たちは心砕かれた者として近づきます。キリストに近づくこととは、私たちが自分で何とかするのだという頑固さが砕かれて、幼子のような心になって近づかなければ、救われることはできません。私たちが、岩なるキリストに砕かれた心で明け渡す時に、この方が私たちを救ってくださるのです。その反対に、私たちがいつまでも自分の苦しみを神に持っていくことをせず、自分の方法を捨てないのであれば、自分の力と知恵をいつまでも信じつづけるのであれば、強制的に砕かれるしかありません。再臨のキリストは、その人をお裁きになります。

私たちは、この方の前に出て救われるために砕かれるか、それともこの方から目を逸らして後に裁かれるために砕かれるかの、どちらかです。どうか、心の衰え果てている時に、自分の可能性を見出せない時に、その時にこそ主の名を呼び求めてください。主は必ず救ってくださいます。